

《第 465 回 (2019年7月11日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：7人 文書参加：2人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア4階集会室

## 『かべのむこうになにがある?』 ブリッタ・テッケントラップ/作 風木一人/訳 BL出版

今月の課題本は先月に引き続き、読書感想文全国コンクールの課題図書から。画面の約9割を占める、大きな赤い壁が印象的な表紙の絵本です。

どこまでも続く赤い壁に囲まれた世界の中には、動物たちが暮らしていました。壁がいつからあるのか、どうやってできたのかなんて、誰も気にしたことはありません。知りたがりの小さなねずみをのぞいては、

好奇心旺盛なねずみは、壁の向こうからやってきた青い鳥に頼み、壁の向こうの世界を見に行きます。色鮮やかで、美しく、夢のような外の世界を目の当たりにしたねずみは、戻ってくる途中、不思議なことに気づくのでした…。

この絵本に出てくる壁は、一体何を喻えたものなのでしょう。「常識」や「偏見」という人もいるでしょうし、勇気がなくて一步踏み出せない気持ちを思い描く人もいるかもしれません。こどもたちがこの絵本を読んで、どのような感想文を書くのか、大人の私たちには気になるところです。「ほんとうのものをみる ゆうきがあれば かべはきえる」という鳥の言葉は、未来を担うこどもたちへ、作者が伝えたいメッセージだと感じました。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●ねずみは、好奇心の塊で、若くて、エネルギーのかたまり。「壁の向こうになにがあるのか」というねずみの質問に対する動物たちの答えは、人間が言いそうなこと。絵本だからするする読めるけど、疑問に思うこともあった。この喩えの意味を作者に聞いてみたい。

●言葉と絵がいつぱいに入ってくる絵本ならではの楽しさがある。ねずみの質問は、こどもの「なぜ?」攻撃のよう。努力をしても、全部の壁を消すのは難しいが、いろんな壁を越えたところにあるといいことがあるかも、という希望のある終わり方だった。

●動物たちが壁をすり抜けた瞬間、体の色が鮮やかになるシーンが、本来の自

分に戻れたようで良かった。世代や価値観が違う中で、壁をなくしていくのはむずかしい。壁がなくなることで、自分たちの本来の色に戻れるというのは希望。

●壁は何を表しているのか? 高学年の課題図書ということだが、中高生が読んだ方が伝わるかもしれない。絵はすごくきれいで、明暗とコントラストが印象的。動物たちが壁を抜けようと思ったきっかけは描かれていないが、気になる。

●絵は小学生でも楽しめるが、内容はもっと上の世代向き。大人になる前のYA世代が読んだらいいと思うし、大人でも読んだらいい。大きい人の方が感動できるのではないかな。壁の向こうの世界は、美しいだけの世界じゃなく、いばらの世界でも良かったなと思う。

●それぞれの世代の読み方がある。自分の年で、壁が何を意味するのかを考えているが、具体的な例を思い描くよりも心で感じたいと思う。このテーマの絵本を読んだのは初めてで、作者には必要なことだけをまとめて描く力があると感じた。

●考えさせられるお話。自分の心が壁を作って、ありもしないものに怯えて差別や偏見が生まれてくるんだなあ…と胸にズンときた。こどもたちはどう感じるのか感想文を読んでみたい。

●この本の持つ壁の意味、読めば読むほど深読みできるので、なかなか難しい。一步踏み出す勇気を得るためには、この青い鳥のように寄り添い、背中をそっと押してくれるような人や本が、こどものそばに必要だと思う。

8月はお休みです!

次回 9月12日(木) 10:00~11:30 オーテピア4階集会室

□『ホームロスのオデュッセイア物語 上・下』

ホームロス/原作 バーバラ・レオニ・ピカード/作 高杉一郎/訳 岩波書店